



Title	七代戦創設と1人の北大生
Author(s)	吉國, 秀平
Citation	北海道大学大学文書館年報, 3, 88-91
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43372
Type	other
File Information	3_88-91.pdf



< 研究ノート >

七大戦創設と1人の北大生

吉 國 秀 平

今回、北海道大学の歴史を受講し、北海道大学がいかにして創設され、どのように移り変わってきたかを学ぶことができた。しかし、私はこの授業を受講しようと決めてから取り上げられないかなと期待していた内容が1つあった。それは七大戦についてである。私は北海道大学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部のリュージュ部門の部長であり、北海道大学体育会クラブの一員として日々活動している。我々は特殊な部活のため、七大戦はないのだが、やはり他の部に聞くと、1年間で最も力を入れる大会は七大戦だという。

私はこの七大戦において、いくつか疑問があった。1つはこれがどのようにして始まったのかということである。今年で46回を数える七大戦であるが、その始まりについて知っている人も少なく、自分も理解していない。そして、もう1つの疑問は七大戦の第1回大会が、北海道大学が主管として行われたということである。このような七大学のイベントの第1回は東京大学や京都大学で行われることが多いように思う。しかし、第1回大会を北海道大学が主管として行ったということは、北海道大学と七大戦の創設に何らかの関係があるのではないかと私は考えていた。

そこで、今回、北海道大学の歴史に関連したレポートを書く機会を得たので、七大戦の創設と北海道大学の関わりについて調べてみることにした。これを調べるにあたり、『北大の125年』などの北大関係の歴史文献には載っていないことから、七大戦を運営している北海道大学体育会の方をお願いして、七大戦の創設に関する資料はないかと聞いてみたところ、少しならあるということなので、それらの資料をお借りして、レポートを作成した。また、お借りする時に北海道大学体育会本部員である中井健人さんから七大戦の創設についてお話を聞くことができたので、それも参考にした。

まず、七大戦について簡単に説明しようと思う。七大戦とは正式名称「全国七大学総合体育大会」の通称であり、この大会は旧帝国七大学である現在の北海道・東北・東京・名古屋・京都・大阪・九州大学が毎年各大学持ち回りで他大学を迎える主管となり、夏をメインに様々な競技を行って、その総合得点で順位を争うものである。

体育会の方からお借りした資料を調べていくうちに、なんと七大戦は北大生が提唱した大会であることが分かった。以下にこのことについて述べる。

1961(昭和36)年に北大体育会委員長となった阿竹宗彦は、セミプロ化しつつある学生スポーツ界へのアピールとして、ぜひとも「学生自身の運営する総合体育大会」が必要と考え、これまで各クラブで個別に行われていた七帝戦を総合化した「国立七大学総合体育

大会」の開催を提唱した。初めは賛同を得られるものではなかったが、北大が掲げる大会の意義や目的、効果、必要性が認められ、その年9月に東京大学で開かれた委員長会議において、第1回大会の開催が決定された。

2004年に北海道大学は主管校となったのだが、この時のパンフレットの中に第3回大会のパンフレットで書かれていた阿竹氏の創設にあたっての苦労などが書かれていた。一部原文のまま抜粋する¹⁾。

私が総合体育大会を初めて企画したのは、委員長に就任した昭和36年5月のことであつた。漠然としていた構想が次第に形を持ってくるにつれて、私の意欲も徐々に高まっていった。しかしその反面前例のないことだけに具体的な方針が定まらず、無謀な計画のように思えて不安でもあつた。実現可能か否かは別としてとりあえず一度各大学に提案しようと決心して、原案を作り、本大会の目的と意義を説明して歩いた。

同年9月東京大学での第1回国立七大学体育会委員長会議は、その直後各大学の賛同を得て開催することができた。会議の焦点は予想通り大会の意義に絞られた。弱輩同士が集まったところで技術的な進歩は期待できないというのが反対者側の意見であつた。格好の相手を得てこそ競争心がわき、お互い進歩するのではないかと私は主張した。それに従来いくつかの部が七大学定期戦を持っており、かなりの成果を挙げている。総合することによって経費も軽減され、勝負意欲も一層増すことは明らかである。5時間の討議の末、一応採決によって結論を出し、大会を開く方針が決定された。

阿竹氏がなぜこのような大会を作ろうとしたかを知る手がかりを北大応援団のホームページで見つけることができた。阿竹氏は第49代応援団団長でもあつたのだ。阿竹氏は私立大学のような巨大な資金に支えられセミプロ化した選手には若さや新鮮さが感じられず、限られた時間の中で精一杯練習して試合で全てをぶつける選手、そして技術的には未熟であろうとも全員が一丸となって熱狂する様な試合こそ真のアマチュアリズムであり学生スポーツのあるべき姿であると考えていた。そこで、同等の規模の大学であり、スポーツレベルも五十歩百歩であつた旧七帝大間の大会こそ学生が真に熱中できるものと考え、七大戦を提唱したというわけだ²⁾。

阿竹氏は上で書かれていたとおり、目的や意義については熟考し、次の5つの目的を掲げた。これは今の七大戦でも変わりが無い。

1つ目は、競技レベルの向上である。

2つ目は、運営費の削減である。

(実際、個別に行われていた対抗戦を統合化することによって、大学・国側の援助もあり、経費削減は確かに行われた。)

3つ目は、真のアマチュアリズムの追求である。スポーツ界に対する商業主義の進出や、

私大に見られる選手のセミプロ化は著しいものがある。下から盛り上がった大会が七大戦の目指すところであり、七大戦こそが真のアマチュアリズムの牽引車として存在しなくてはならない。

4つ目は、他大学との親睦を図ることである。

5つ目は、学生の手による自主運営である。

(実際、これは創設時より守られていることであり、七大戦にまさる規模の学生主体の大会はないと思われる。)

私はこの1つ目の目的に阿竹氏の創設にかける思いが感じられた。第1回の委員長会議で出たように弱輩同士が集まっても競技レベルは向上しない、私立大にはかなわないという反対意見は確かにあるかもしれない。しかし、弱者同士の傷のなめあいをするのではなく、七大戦が全国の国立大学の、ひいては学生スポーツのレベル向上を担わなければならないという確固たる意思を持ってこの案を提唱したということが阿竹氏自身の文脈からも感じ取れた。近年では、2006年のボート部の全日本学生選手権優勝に見られるように私立大にも負けにくい程度の力を持つまでに成長した北海道大学の部活動の競技レベルはこの阿竹氏の強い意志から受け継がれたといってもおかしくないとは私は考えた。

第1回会議の後、七大戦創設までどのように進んだかということ、まず翌年1月の京都大学で開かれた第2回会議では、提唱校の北大から具体案が出されたが、内容的にはあまり進展しなかった。しかし、阿竹氏は、「各大学とも積極的な態度で検討し、次第に意欲的になっている様子がうかがえた。幾度となく慎重に討議を重ねながら徐々に進展していく様子が好ましく思われ、秘かに、この分なら成功するかもしれない。」³⁾と感じていたことが2004年の七大戦パンフレットにより分かった。

3月の大阪大学での会議では阿竹氏の期待通りに討議が行われ、ほとんど最終的な決定がなされるかに思われた。ところが、ここで大きな問題が浮上した。学校側の意向が未だ統一されていなかったのだ。この大会は、あくまでも学生が主体であり、主導権は体育会の組織にはあったが、多くの大学は、学生部からの援助なしでは実行できない状態にあった。この対立が、最後のそして最大の難関であった。そのような中、4月合同会議が開かれた。しかし、それは結果的には本大会成立が決定された画期的な会議となった。学生部側が持っている不安や疑問を解消させるために、各体育会がそれぞれの立場から力を注いだのだ。そして、各運動部員の熱意と、体育会のやる気ある積極的な態度に、学生部もついに協力してくれたのである。

このようにして、第1回七大戦が阿竹氏の敬意を表して北海道大学主管のもと行われたのだ⁴⁾。第1回大会後に作成された資料『第一回国立大学総合体育大会』では、第1回大会の反省として、財源確保の問題点や競技施設に対する不満、各大学の七大戦に対する意欲差が挙げられた。

しかし、第3回大会ではそれまで七大戦に消極的であった京都大学が積極的に大会運営を行い、開会式前のパレードなど新たな試みをなし、運営の緻密さ、準備の周到さ、大会

の盛り上げなどが格段に進歩した。これにより七大戦は軌道に乗り、2007年で46回を数える大きな大会にまで成長したのである。

阿竹氏が掲げた目的を今後も忘れず、これからもこれらを達成できるように七大学の皆が七大戦に協力していかねばならない。そして、北大生である我々は七大戦の提唱者が北大生であったことに誇りを持ち、その創設の歴史をしっかりと理解して、これからも後輩にその歴史を伝えていかなければならない。

最後に

今回のレポート作成で最も苦勞した点は、資料集めでした。北海道大学体育会の中井さんによると、七大戦の第1回からのパンフレットをすべて持っているのは七大学のうち東北大だけらしいのです。他の大学は捨ててしまったそうです。そのため、北海道大学に存在する七大戦関係の書類のうち、七大戦創設について詳しく書かれている書類はわずかであり、その中から阿竹氏が書いた文章を発見できたことはとても幸運でした。第2回目の授業で井上高聡先生から歴史的資料についての説明をしてもらいましたが、やはり、今、歴史的資料となるものを捨ててしまったということはもったいないなあと実際に調べてみて感じました。

今回のレポートでは、図書館などの本を探せばすぐに見つかるものでなく、資料があるかどうか分からない内容を課題として選び、どこに資料があるかということを考え、自らの疑問だったことを解決するという過程を取りました。疑問も解決し、近藤健一郎先生や池上重康先生がおっしゃっていた「自らが進んで調べる」ということを達成できたので、自分としてはこの授業の目標に到達できたのではないかと考えています。

【注】

- 1) 『第43回全国七大学総合体育大会パンフレット』（北海道大学体育会、2004年7月、9頁）より重引。
- 2) 「七大戦（全国七大学総合体育大会）」（北海道大学応援団ホームページ）
<http://hokudaiendan.web.fc2.com/nanadaisen.html> を参照。
- 3) 前掲『第43回全国七大学総合体育大会パンフレット』9頁より重引。
- 4) 第1回大会のパンフレットの現物は北海道大学にはないのだが、その表紙が分かる記事は前掲『第43回全国七大学総合体育大会パンフレット』10頁に掲載されている。

【参考文献】

- ・『第43回全国七大学総合体育大会パンフレット』（北海道大学体育会、2004年7月）
 - ・北海道大学体育会会報『北溟』第43号（2007年3月）
 - ・田中義人「七大戦とは」『九州大学全学教育広報 radix』No.42（九州大学高等教育総合開発研究センター、2005年9月、4頁）
 - ・田村祐一「全国七大学総合体育大会（大阪大会）」『阪大NOW』No.89（大阪大学総務部評価・広報課、2006年4月、22～23頁）
- （よしくに しゅうへい／北海道大学農学部畜産科学科2年）